

研究課題	『十巻章』内の諸著作の再考察、 及びそれに相對する末釈類の整理と考察
研究代表者	弧 島 玄 明（仏教学研究科博士後期課程仏教学専攻）

① 研究の目的

本研究は、真言宗における重要典籍である『即身成仏義』一卷、『声字実相義』一卷、『吽字義』一卷、『弁顯密二教論』二卷、『秘蔵宝鑰』三卷、『般若心経秘鍵』一卷、『菩提心論』一卷の七部十巻を集成した『十巻章』について、それぞれの注釈書を用いて総合的に整理、考察を行うことを目的として行われた。

『十巻章』の研究については、総合的には、昭和59年に小田慈舟師により著された『十巻章講説』がある。しかしこの『十巻章講説』以外では、『十巻章』の総合的な研究は少ない。また、各『十巻章』諸著作の研究についても、それぞれの注釈書類の研究は諸先生方によって行われているものの、注釈書類を総合的に用いた研究があまりなされていないとされる。

そのため本研究では、『十巻章』各著作と、それぞれに対応した注釈書類をデータベース化し、考察を行うに足るデジタルデータベースの構築を第一目的として、またそのデータベースを用いた『十巻章』諸著作の総合的な研究を第二目的として研究を行った。

本研究は用いる書物があまりに多い為、数年かけての研究となっており、また共同研究として先生方や複数の修士生の協力のもと行われている。

そのため2010年度では、『秘蔵宝鑰』と『秘蔵宝鑰』を中心とした注釈書類の研究、調査を中心に行った。

『秘蔵宝鑰』を選択した理由としては、研究代表者の個人研究の一部に関わるものであり、研究分担者の研究分野において重要な位置を占める書物であるためである。

また、研究協力者となっている修士生については、書物情報の扱い方や、後述するが古写本の扱い方などの、自らの研究の視点を広げることができたかと思う。

② 研究の経過

本研究では、1・『十巻章』各注釈書の読解及び考察、2・『十巻章』同一著作の各注釈書同士の思想の

同異の比較、考察、3・『十巻章』同一著作の各注釈書の時代ごとの思想の変遷についての研究、4・注釈書の考察を通して、『十巻章』諸著作の総合的な考察の、4点を成果として期待し、研究を行った。

研究の方法としては、『十巻章』諸著作について、1つ1つ先行研究を基に再考察を行うと同時に、『十巻章』の1つの著作に対して複数の注釈書を用いて、『十巻章』著作の内容の再整理、考察を行った。

具体的には、前述の『十巻章講説』や、加藤精一「〈秘蔵宝鑰〉と〈秘密曼荼羅十住心論〉の関係について」などの先行研究を、共同研究者、研究協力者とともに読解し、それらの先行研究を基に『十巻章』内『秘蔵宝鑰』の再考察を行った。また『真言宗全書』及び『続真言宗全書』などから『秘蔵宝鑰』に関する注釈書を抜き出し、データベース化を行いつつ内容の比較、考察を行った。

2010年度に調査を行った書物は以下の通りである。

- ・『秘蔵宝鑰勘註』 著：頼瑜
『真言宗全書巻十一』収録
- ・『秘蔵宝鑰鈔』 著：藤原敦光
『真言宗全書巻十一』収録
- ・『秘蔵宝鑰私書』 著：政祝
『真言宗全書巻十一』収録
- ・『秘蔵宝鑰鈔』 著：宥快
『続真言宗全書巻十九』収録

このうち、宥快著の『秘蔵宝鑰鈔』については、その分量の多さから、データベース化作業を見送った。

2010年度の本研究における共同研究の研究経過は以下の通りである。

- ・2010年4月～2011年3月……月1回程度の研究会を行う。その際、用いる注釈書ごとに班分けを行い、先行研究からの再考察、及びデータベース化作業を班ごとに発表させた。具体的には、各班に自らの担当する注釈書に関する先行研究の調査をさせ、注釈書著者の略歴や、注釈書を記した際の時代背景などについても調査を行わせた。
- ・2011年2月7～8日……京都種智院大学において

聖教調査を行う。具体的な書物名については後述。
ここでは図書カードの制作及び、今後の研究会に、いかに用いるかの話し合い等もあわせて行った。

- ・2011年2月9～10日……水戸・六地藏寺において聖教調査を行う。具体的な書物名については後述。ここで調査をした古写本については、六地藏寺の許可を取り古写本の写真を撮影し、今後の研究に用いることとした。

また、デジタルデータベース化作業としては、班ごとに作業を任せて行わせた。以下に作業手順等を記す。

底本としては、『弘法大師著作全集』、『弘法大師全集』、『大正新修大蔵経』、『真言宗全書』、『続真言宗全書』を用いた。

各注釈書のデータベース化作業については、マイクロソフトのワードを用い、底本を忠実に打ち込む。具体的には、文字数、行数、旧字新字等の漢字、梵字については極力その内容通りに打ち込み、例外は『今昔文字鏡』に無い文字のみ認めた。

返り点については「下付き」機能を、仮名については「上付き」機能を用いて行う。特別な読み方をさせている送りかなや対校本等の特記がある場合には、文末注として処理する。

底本に組み文字として書かれているものについては、フォントサイズを下げ、網掛けを着けて処理する。ワード内にある「組み文字」機能は用いない。

基本的には、上記のルールのもと研究分担者、研究協力者に打ち込み作業を任せた。

また、「々」については「ㄥ」に統一し、仮名として書かれている漢字「兎（して）」「添（こと）」等の記号はカタカナにし、「玉フ」等、漢字でも判別のつく仮名についてはそのまま入力する。それ以外の仮名については原文をそのまま打ち込むこととし、濁点が必要な場合でも底本に濁点表記がなければ清音で入力するとした。

③ 研究の成果

本研究の成果については、データベース化作業について、また聖教調査の結果についての二点を中心に記す。

まず、データベース化作業についてである。

データベース化作業については上記の書式を用いて作業を行い、打ち込み作業については終了した。しかし打ち込み作業データのデータベース化についてはまだ完了していない。

研究会では『仏教体系』をモデルとしたデータベ

スの構築を目標としてデータベース化作業を進めている。そのための方法としては、まず打ち込みデータの精査、そしてデータベースを構築する為の内容分析を第一段階として行い、第二段階として注釈書の内容ごとに細分化し、内容の比較ができる状態にすることを目標にしている。そしてデジタルデータベースとしての利点を生かす為に検索、ファイル同士の比較、リンク等を付し使いやすいデジタルデータベースの構築を行う。

現在の状況では、全体としては上記の第一段階を終了し、第二段階を行っている。

具体的には、『秘蔵宝鑰勘注』を例に挙げるとして、本文のデータベース化作業については、仮名、返り点、及び脚注等を付す作業を終え、打ち込みデータの精査作業も完了している。ここでは、判読不能文字や、梵字等については入力できないものは赤字で表記をし、後の内容精査の際に調査を行う。

その上でデジタルデータベースとして用いるために、注釈書に引用されている引用経典、引用文献の調査、研究を行い、内容を細分化し、比較できるデータとするための作業を行っている。また、同時進行でデジタルデータベースとしての利点を構築するための作業も進めている。

例を挙げた『秘蔵宝鑰勘注』では、以下のように示すことができる。なお、データベース自体は縦書きで行っている。

第六他縁大乘心

大日経第一住心品云。復次^ニ秘密主大乘^ノ行^{アリ}。発^ニ無縁乗^ノ心^ヲ。法無我性^{ナリ}文同疏第二一行記云。梵音^ニ莽鉢羅^{トイハ}是^レ無^ノ義^{ナリ}。亦是^レ他^ノ義^{ナリ}。所^レ謂^ニ他縁乗^{トイハ}者。謂^ク発^{シテ}平等^ノ大誓^ヲ爲^ニ法界^ノ衆生^ノ行^ニ菩薩^ノ道^ヲ約^{スル}此^ノ無縁^ノ大悲^ニ故^ニ名^ク他縁乗^ト又無縁^ノ者^ヲ解^ニ了^{シテ}三界^ノ唯心^{ナリ}心^ノ外^ニ更^ニ無^シ一法^{トシテ}而^モ可^キ得^者。乗^{シテ}此^ノ無縁心^ニ行^ニ大菩提^ノ道^ヲ。故^ニ名^ク無縁乗^ト也文演密抄第三覺苑云。疏^ニ発無縁乗心等^ト者^ハ。此心^ニ有^ニ。一^ニ約^ニ真心^ニ二^ニ約^ニ事心^ニ。今初^ハ理運彌載^ノ真心^ヲ名^レ乗^ト。謂^ク諸^ノ行者解^ニ了^{スル}三界唯心^ニ心^ノ外^ニ更^ニ無^シ一法^ト故名^ク無縁^ト。無^ハ即一心^{ナリ}。則是^レ能遣^{ナリ}。縁^ハ爲^ニ萬法^ト。乃目^ク所無^ニ以下諸^ノ行者乗^{シテ}此^ノ真心^ニ直^ニ至^ル中道場^ニ上故^ニ曰^ク発無縁乗心^ト也。二^ニ事心^ト者。萬行濟^ニ物^ヲ事心^ヲ名^レ乗^ト。謂^ク諸^ノ行者觀^ニ於^ニ六道^ヲ隨^ニ縁^ヲ普^ク利^{シテ}而無^レ自他能所之相^ト名^テ爲^ニ無縁^ト。

上に挙げたものは『秘蔵宝鑰勘注』の第五巻の一部である。現在は内容の精査及び内容の分析が終了している。

次の段階として、このようなデータを、ここでいえば「第六他縁大乘心」という区切りや、引用經典ごとの区切りで細分化し、注釈書同士の比較ができるデータベースの構築を行っている。

また、ここでは『大日経』（『大毘盧遮那成仏神変加持経』）、『大日経疏』（『大毘盧遮那成仏経疏』）、『演密抄』（『大日経義釈演密鈔』）が引用されているが、これらの引用經典についても調査を行い、デジタルデータベース上でリンク等を付す作業を行う。

その結果、以下のようにデータベース化を進めている。

第六他縁大乘心

大日経第一住心品云。復次「秘密主大乘」行アリ。発「無縁乗」心ヲ。法無我性ナリ文

同疏第二一行記云。梵音「莽鉢羅」トイハ是「無」義ナリ。亦是「他」義ナリ。所謂「他縁乗」トイハ者。謂「発」シテ平等ノ大誓ヲ爲シ法界ノ衆生ノ行フ菩薩ノ道ヲ〇約スル此ノ「無縁」大悲ノ故ニ名ク「他縁乗」ト〇又「無縁」者〇解「了」シテ三界ハ唯心ナリ心ノ外ニ更ニ無シト一法トシテ而可「得」者ノ一。乗「シテ」此ノ「無縁心」ニ行フ大菩提ノ道ヲ。故ニ名ク「無縁乗」ト也文

演密抄第三覺苑云。疏「発無縁乗心等」ト者ハ。此心ニ有レ二。一ニハ約シ真心ニ二ニハ約シ事心ニ。今初「理運彌載」ノ真心ヲ名ク乗ト。謂ク諸ノ行者解「了」スル三界唯心ニシテ心外ニ更ニ無シト一法ト故名ク「無縁」ト。無ハ即一心ナリ。則是「能」遣ナリ。縁ハ爲シ萬法ト。乃目ク所無ニ〇以テ諸ノ行者乗「シテ」此ノ真心ニ直ニ至ルヲ道場ニ故ニ曰「発無縁乗心」ト也。二ニ事心ト者。萬行濟フ物ヲ事心ヲ名ク乗ト。謂ク諸ノ行者觀「シテ」於六道ヲ隨フ縁ニ普ク利シテ而無シハ自他能所之相ニ名ク爲シ無縁ト。

上記のいくつかに示した下線部には、データベース上ではハイパーリンクを付し、該当する引用經典へリンクできるようにする。また、『秘蔵寶鑑』本文の「第六他縁大乘心」部分より、この『秘蔵寶鑑勘註』の当該部分へのリンクをはり、『秘蔵寶鑑』本文の当該部分が、注釈書によりどのように注釈されているかを比較できるようにする。また、この作業については全ての注釈書を同様に行う。

また、詳細が未調査な引用文献が出てきた場合には、聖教調査等でそれぞれの調査を行い、可能ならば詳細を、上記の引用經典同様にハイパーリンクを付したうえで比較できるようにする。

更に、他の注釈書の該当部分と、この当該部分との比較できるようにリンクを付す作業も同時に行っている。

以上がデータベース化作業についてである。

次に聖教調査についてと、その結果について述べる。

2010年度では、京都・種智院大学、及び水戸六地藏寺に赴き聖教調査を行った。

その方法としては、まず『国書総目録』等による写本類の調査を行い、現在閲覧可能な図書館へのアプローチを行った。その結果、種智院大学図書館へは2011年2月7日、8日に閲覧の許可を頂き、六地藏寺には2011年2月9日、10日に閲覧の許可を頂いた。

調査については、『秘蔵寶鑑』関連の古写本、古刊本について可能な限り閲覧を申請し、図書カードを作成した。この図書カードについては今後の研究に生かす。また、同時に『十卷章』他著作の注釈書類についても同様に調査を行った。

六地藏寺に関しては、写真撮影の許可を頂き、古写本七部の写真撮影を行った。これにより、写真データを用いた調査が行えることとなり、今後の研究作業をより発展させることができる。

なお、それぞれの調査については研究代表者、研究分担者、及び研究協力者と共に行った。

以下に、調査を行った古写本、古刊本について記す。

まず京都、種智院大学図書館で行った聖教調査である。

○古写本

- ・『菩提心論教相記講要』沙門真賢纂
- ・『菩提心論教相記蒙引卷下』南嶽沙門義剛述

○刊本

- ・『秘蔵寶鑑見光鈔卷上』
- ・『秘蔵寶鑑見光鈔卷中』沙門妙瑞撰
- ・『秘蔵寶鑑見光鈔卷下』沙門妙瑞
- ・『秘蔵寶鑑見光鈔卷中』
- ・『秘蔵寶鑑見光鈔卷下』沙門妙瑞
- ・『菩提心論教相記上』、『菩提心論玄談』
- ・『菩提心論教相記下』
- ・『菩提心論教相記玄談』
- ・『秘蔵寶鑑開宗記卷一』
- ・『秘蔵寶鑑開宗記卷二』
- ・『秘蔵寶鑑開宗記卷三』
- ・『秘蔵寶鑑開宗記卷四』
- ・『秘蔵寶鑑開宗記卷五』
- ・『秘蔵寶鑑開宗記卷六』
- ・『秘蔵寶鑑開宗記卷七』
- ・『秘蔵寶鑑開宗記卷八』
- ・『秘蔵寶鑑開宗記卷九』
- ・『秘蔵寶鑑開宗記卷十』

以上の古写本・刊本の内、刊本については江戸期の成立であることが、内容等の判断から推測できた。しかし、年代が明記されていないため、具体的な成立年

代までは調査できなかった。

また写本については、状態があまり良くなかったため、具体的な年代については調査できなかったが、内容等からおそらく江戸期の成立のものと推測できた。

なお、同名の書物については、種智院大学図書館に所蔵されている同名、同内容の別本であり、それぞれに違った引記や手書きの脚注等が付されていたため、図書カードを作り調査を行った。

これらの古写本・刊本の図書カードは、今後のデータベース化の作業の際に注釈書データとして用いる予定である。

次に水戸、六地藏寺で行った聖教調査である。

六地藏寺で行った聖教調査については、全てが写本であり、所有者の許可を頂いた上で写真撮影を行った。

- ・『寶鑑中間書』
- ・『秘蔵寶鑑中間書』
- ・『寶鑑上聞書』
- ・『寶鑑上』
- ・『寶鑑巻中』
- ・『秘蔵寶鑑巻中私聞書』
- ・『秘蔵寶鑑胸敢集』

以上の書物は、著されたのが室町期であることが明記されている。また、写本の状態も良かった。

これらの古写本については、種智院大学図書館と同様に図書カードを制作し、今後のデータベース化作業の際に注釈書データとして用いる予定である。

以上が、京都、種智院大学図書館及び、水戸、六地藏寺で行った聖教調査である。

さらに、これらの聖教調査により、研究分担者、及び研究協力者の各自の研究がより幅広く行えるようになった。以下にその理由を示す。

○研究分担者、及び研究協力者それぞれが、古写本等の聖教に興味を持ち、実際に自身の研究分野の聖教の調査を行っており、協力者自身が調査申請を行うなどの聖教調査、写本研究を積極的に行い、各自の研究に役立てている。

○聖教に直に触れるに当たり、古書類の取り扱い方や図書カードの記入法などの基本的な注意から、聖教の年代、紙質、筆跡、読み方などについて、諸先生に教授して頂いた。そのため、このことは研究に携わった学生全員が、個人の研究に応用できる知識、技術を得られたと思うので、大いに感謝している。

○聖教調査の申請願いを出した諸寺院、諸研究機関の多くには、おおむね協力的なお返事を頂いており、調査に赴いた諸寺院・諸研究機関については、分担

者、及び協力者個人の研究の足がかりになると思われる。

○協力者の中には、多々ある辞書の用い方、調査方法などや、諸寺院・諸研究機関に送付する申請書の書式がわからない者もいたが、共同研究に重ねて出席していくなかで、このような知識や技術を少しずつ習得した。この研究を通じて、こうした知識や技術が、研究分担者、及び研究協力者のそれぞれの研究の幅をひろげられたと考えられる。

以上が、聖教調査の結果についてである。

本研究に関しては、研究協力者の協力が不可欠であり、これらデータベース作成、及び聖教調査を通じて、協力者の知識、技術の向上が行えたことも、研究の一つの成果といえる。

④ 研究の課題と発展

本研究は、2008年度には『即身成仏義』を、2009年度には『菩提心論』を、データベース化及び考察の対象として研究を行った。

しかし各『十巻章』諸著作とその注釈書類のデジタルデータ化は完了したものの、データベース化、及び内容考察に関しては今一步踏み込めなかった。

また、2008年度年度、2009年度共に聖教調査を行った際の写本の写し、及び書誌データについては未整理のままであり、これらの整理、及びデータ化についても行われていない。

本研究の課題としては、まずデータベースの完成、そして制作したデータベースの実用実験、及びデータベースを使用した上での考察を行い、『十巻章』の再考察を行うことである。

そのための方策としては、先に述べたデータベース制作の作業を終えることが必要である。

データベース作成作業としては、扱いやすく閲覧しやすいものを制作する必要がある。そのためには、まず『十巻章』諸著作の、先行研究を中心とした内容の把握及び考察から、データベース化の際の内容分類を行う必要がある。

『十巻章』の内、『秘蔵宝鑑』については、先行研究からの調査を行った。そのため当面は、その調査内容からデータベース化を進める必要がある。

また、聖教調査で収集した古写本、刊本についても、目録の制作を行い、書誌データを管理する必要がある。またコピーをした古写本等の書物については、読み合わせの上、必要があれば調査を行いデジタルデータベース

に組み込む必要があるため、その調査も行いたい。

その上で、データベースを用いた『十卷章』諸著作について、それぞれの著作の注釈書類を用いた調査、再考察を行う。

この研究により、『十卷章』諸著作と、『十卷章』諸著作に関する注釈書類の総合的研究が行えるという点で、本研究は次のような発展を考える。

まず、高野山大学や六地藏寺のように、本研究に協力して頂ける各研究機関、各寺院に対してさらなる聖教調査等を行い、『十卷章』諸著作に関する注釈書類のデータベースを構築することにより、今後の研究の発展に貢献できるだろう。また、これらの古写本については、できる限り収集し、調査を行う予定である。

また、『十卷章』諸著作、及び各注釈書のデジタルデータベースの構築により、『十卷章』の総合的な調査と個々の内容の部分的調査の両面が行えることになるだろう。具体的には、注釈書類同士の内容比較や、引用経典の引用部分に関する考察、『十卷章』の他著作の注釈書との比較による著者に関する調査、年代の違う注釈書を比較することでの時代ごとの『十卷章』のとらえ方の研究などが行える。

また、これらの点は研究代表者、及び研究分担者の個人研究のテーマに対しても発展性を持たせることができる。

研究代表者は、平安後期から鎌倉前期にかけて著された『図像集』を用いた研究を行い、研究分担者は護国思想について研究を行っているが、共に真言宗の思想についての、時代的、法流的な変化を調査する必要がある。本研究を行うことにより、真言宗の重要典籍である『十卷章』に関する注釈書の変遷を追うことができ、一面的ではあるが、真言宗における時代的、法流的な変化を見ることができるからだ。

本研究は今後も、デジタルデータ化が終了した『即身成仏義』、『菩提心論』、『秘蔵宝鑰』を手始めに、『十卷章』諸著作とその注釈書類のデジタルデータベース化、及び考察、研究を続ける予定である。